

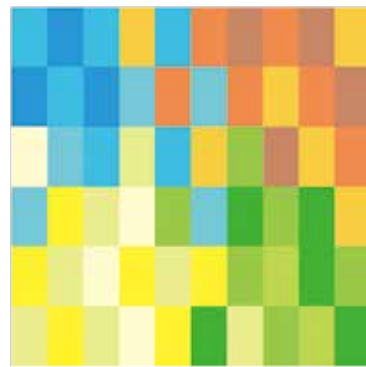
みどり樹

特集

食と農をつなぐ共創拠点
アグリフードシステム先端研究
センター(YAAS)が始動。

研究室訪問 / 大学院医学系研究科医療政策学講座

持続可能な地域の
医療体制構築を目指す。



YAAS

YAMAGATA UNIVERSITY
ADVANCED AGRI-FOOD SYSTEM
RESEARCH CENTER





庄内から始まるイノベーション。 食と農をつなぐ共創拠点 アグリフードシステム 先端研究センター(YAAS)が始動。

2022年7月、4つの学部の教員が参加する「山形大学アグリフードシステム先端研究センター(YAAS)」が鶴岡キャンパスで始動した。未来の社会を支える食と農の実現を使命に新たな仕組みを確立し、持続可能な農業と循環型の社会を目指す。センターのベースとなる活動に尽力してきた農学部の渡部先生に話を聞いた。

これまでの循環型 食料生産プロジェクトが基盤に

2022年、日本の食料自給率が過去最低を更新した。食料自給率が世界でも下位に入るほど低い日本。食卓に並ぶ食品のほか、国産の野菜や肉を生産するための肥料やエサのほとんどを輸入に頼っているのが現状だ。さらに地球規模の気候変動や人口増加、国内農業人口の減少など

が追い打ちをかけ、食と農をとりまく危機的状況は悪化の一途を辿っている。

そんな状況を背景に立ち上がったのが「山形大学アグリフードシステム先端研究センター(以下YAAS)」だ。その基盤となったのは、農学部が「スマートテロワール構想」のもとで行ってきた取り組みだ。

スマートテロワール構想は、(株)カルビー元社長の故・松尾雅彦氏が提唱し、地域資源を活用した強く美しい循環型農村経

済圏をつくることを目指す。生産・加工・流通を合わせた6次産業に関わる地域のプレイヤーが協働し、地域全体が豊かになることを理想としている。

農学部では2016年より松尾氏からの寄付を得て、『食料自給圏「スマートテロワール」形成講座』を設立し、その研究成果によって得られた技術やサービスを社会実装してきた。

YAASの基盤を成す研究プロジェクト



「庄内スマートテロワール」(浦川先生)
耕畜連携でエサづくりから消費までを地元で循環する庄内スマートテロワールブランドの豚肉加工食品。美味しく購入しやすい価格帯で、取り扱う地元スーパーが増えている。



「ビストロ下水道」(渡部先生)
これまで捨てていた下水道資源を利活用し食に還元する「ビストロ下水道」。下水処理水で育てた苔をエサにする風味豊かな「つるおか BISTORO 鮎」がまもなく商品化。



「アルファ化米」(西岡先生)
米粉100%パンの製造技術とそれを可能にした新アルファ化米粉を他に先駆け開発。新しい米粉食文化を世界に広げる。



食の10次産業化によるスマートアグリフードシステムの仕組み (図)

農学部が推進する食料自給圏 (スマートテロワール)

循環型食料生産 耕畜連携・農工連携(農工一体)・工商連携(地産地消)



他学部における先進的研究 (山形大学の総合知)



食の10次産業化によるスマートアグリフードシステム



1次産業 × 2次産業 × 3次産業 + 4次産業 = 食の10次産業化

循環を加速させる 食の10次産業化

YAASではこれらの研究成果をさらに展開するべく、「食の10次産業化」をビジョンとして掲げている。これはスマートテロワール構想のもとで農学部が築いた6次産業と、山形大学の他学部における先進的な研究成果を4次産業(データサイエンス、コホート予防医学、食のリテラシー、ものづくり工学)として有機的にかけあわせた新たな概念のこと(図)。これにより例えば、データベースを導入して大幅な作業効率化を図る、最新の加工技術を組み合わせ課題解決につながる新たな商品やサービスを生み出す、といったことができるようになる。目下の目標は文部科学省からの支援を受ける5年間で、循環を加速・発展させるバリューチェーン「スマートアグリフードシステム」を構築することだ。その後も研究成果を地域貢献や教育につなげ、国内外で最先端のアグリフードシステム研究拠点になることを目指していく。

研究成果を 地域につなげるために

センターには、生産・加工・流通、そして社会システムを担う4つの部門がある。ここに山形大学の4学部から24名の教員が所属し、それぞれの専門分野を深め、研究と社会実装を展開していく。学部を超えたオープンな研究体制が特徴だ。またほかにも注目したいのが、広告代理店(株式会社SIGNING)のメンバーが連携研究員として関わり、広報・商品のブランド化のほか、まちづくりを含めた社会変革の役割を担う点だ。ここには、大学や行政が不得意としてきた情報発信や地域への「自分ごと化」の部分を補うことで、研究成果を着実に地域につなげ、地域全体を盛り上げていくという狙いがある。産学官民連携や効果的な社会実装が特に求められている近年、ほかのどの大学でも類を見ないYAASの新しい連携の形に今後の期待が高まる。地域にひらかれた山形大学の新しい挑戦、山形・庄内地域からはじまる食と農のイノベーションは幕を開けたばかりだ。



渡部 徹

わたなべとおる ●山形大学農学部教授・副学部長。専門は水環境工学。1998年に東北大学を卒業後、同大、米国ドレクセル大学、東京大学を経て、2010年に山形大学着任。ピストロ下水道の他、新型コロナウイルスなどの病原微生物の検出・除去についても、多くの研究業績を残している。



多様な自然とともにある農業地域・庄内を表したYAASのロゴ。青が海、緑が山、黄が実った水田、茶が畑を表現している。

「スマートテロワールシティ」庄内を世界へ YAAS×SIGNINGが描く庄内の未来。

YAASの研究成果を 地域につなぐ協働者

YAASでは、研究成果をいかに実社会で活用し地域に定着させるかということに重点を置いている。その重要な役割を担うのが、「SIGNING」だ。メンバーのひとり、山形大学の連携研究者でもある鶴岡出身の牧さんにお話を伺った。

SIGNINGでは、YAAS立ち上げの背景にある問題意識や、地域貢献のために革新を起こしたいという思いに共感し参加を決意。専門分野である広告代理業の強みを生かし、大学・行政・地域をつなぐ媒介役となり、研究成果の社会実装、そして庄内エリアの社会変革を加速させる役割を担う。

まずSIGNINGが取り組む業務のひとつが、広報・ブランディングを通じた研究成果の事業化だ。ここでは様々な研究技術のネーミングを立案し、ロゴなどのデザインも行う。さらにそれをもとに地元企業などに商品開発のプランを提案し、共感する企業らとともに事業化を進めていく。YAAS始動から1年間で、地域循環型の庄内野菜を



現在進行中の、在来野菜を活用したスイーツを開発するプロジェクト。



12の活動テーマからなるスマートテロワールシティ構想

使ったスイーツの開発のほか、アルファ化米のブランディング、食と農を軸にしたブランディング事業計画などが進んでいる。

そしてもうひとつ、SIGNINGが目下取り組んでいるのが、YAASが目指す社会の姿をまちづくりに展開してビジョン化した「スマートテロワールシティ構想」だ。「山形大学がリードする『スマートテロワール』は世界をリードできる領域です。オランダのアムステルダムが『サーキュラーエコノミー（循環経済）』の先進都市として、欧米で独自のポジションを確立したように、庄内はスマートテロワールで世界で唯一無二のまちになれるポテンシャルがあります。」と牧さんは話す。YAASを基軸にまち自体を再活性化し、農業を起点に産業をつくり、まちをつくり、人をつくる。そして世界から「スマートテロワールといえば庄内」と認知される地域を目指す。「包括的な観点から地域を良くするための活動としてYAASを発信し、様々な仲間を増やして

社会への定着を目指していきたい。」その意気込みにセンター研究者からの期待も高まる。

本年7月には農業研究から食の事業化へをテーマにしたイベント「山大イノベーションキッチン」を開催。YAASの重点的プロジェクトであるアルファ化米粉や豚肉加工品を地元の料理人が調理し、来場者が試食した。ここでは研究シーズを料理人による食のアウトプットとして実際に体験してもらうことで、熱量やアイデアを共有し、来場者が「自分ごと化」するきっかけとなる場を創出した。

今後は、スマートテロワールシティ構想の中心を担う地域の生産者や料理人とのネットワークづくりを強化していきたいという牧さん。懇親会交流会を定期開催するほか、YAASで生まれる多数の研究シーズを一挙に体験できるプラットフォームとしてのレストランをつくる計画も進んでいるという。YAASの研究成果を誰もが五感で味わい体験できる日は遠くない。

「SIGNING」とは？

「新しい世界に道標を」を合言葉に、Social DesignとNew Market Designに取り組む「兆し」からより良い社会への“道標”をつくるソーシャルビジネススタジオ。これまでの実績として、大手飲料メーカーのブランディング・コミュニケーション開発やビジネスカンファレンス『Innovation Garden』の企画プロデュースなどに携わってきた。



牧貴洋

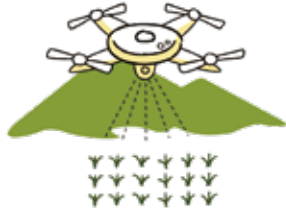
まきたかひろ ● 株式会社SIGNING 共同CEO、ストラテジスト。博報堂で戦略プランナーとしてキャリアを重ねる。2020年4月にSocial Business Studio「SIGNING」設立に参画し以降現職。

部門紹介

4つの部門で研究力の強化と食の10次産業化によるスマートアグリフードシステムの確立を目指します。

部門 01 サスティナブルアグリ生産部門

農業分野におけるAIの開発。気候変動に対応し進化するスマートアグリ開発研究。



学生の声

これまで数値で見えなかった事象を見える化することで、ワクワクを感じます。

農業AIの開発

市浦茂助教 専門分野/スマート農業分野

農畜産業の多様な課題をデジタル技術で数値化し、共有、改善につなげる、データ活用共創プラットフォーム“DuCop”の立ち上げを進めています。並行して、企業や他大学、研究機関、自治体と連携し、共同研究、受託研究を増やし、これまでの研究で得られた知見の迅速な社会実装を推進中です。

部門 02 高付加価値機能性フード部門

食品加工、発酵・醸造技術を活用。機能性食品開発への応用。



学生の声

山大アルファ化米粉の認知度アップのために「山大米粉ひろめ隊」を結成しました。今後も学生目線で普及活動に尽力したいと思います！

アルファ化米

西岡昭博教授 専門分野/高分子物性、高分子レオロジー、食品科学

米など澱粉を主成分とする穀物の斬新なアルファ化技術の開発とその応用用途に関する研究を行っています。この研究よりこれまで難しいとされてきたグルテンフリー食品を可能としただけではなく、最近では澱粉を用いたバイオマス樹脂など様々な用途に応用され始めています。今後も農工連携を進め、斬新な研究成果をYAASから発信していきたいと思っています。ご期待ください！

部門 03 アグリフードブランディング部門

生産物の特色を生かしたブランディング。パッケージ新技術などでサポート。

学生の声

私も研究に参加して自分の健康を知るきっかけになりました。ぜひ一緒に参加しませんか？



DXを活用した食ブランディングコホート研究

五領田小百合助教 専門分野/食行動科学、ソーシャルマーケティング、公衆衛生学

『農からおいしい健康をつくる』をテーマに誰もが食で幸せになれる未来を目指して、農家、行政、医学部や工学部の教員と連携しながら、農産物の栽培管理、成分分析をしたうえで、それらの摂取による身体的および精神的影響を調べています。被験者として参加したい方は、当研究室までお声かけください！

部門 04 スマートフード社会システム部門

供給側の視点に健康コホートや食のリテラシーといった山大の強みである消費側の視点を融合。

学生の声

地元のスーパーマーケットでの試食販売会などを通して、多くの人たちとの出会いがあります。



スマートテロワール

浦川修司教授 専門分野/畜産学(飼料作物)

農学部のある庄内地域に循環型農村経済圏(スマートテロワール)を構築するため、庄内地域の多くの人たちと連携し、地域産原料を用いた美味しい加工食品の製造販売に取り組み、これまでにウインナーソーセージなどの開発を行ってきました。今後、新たな商品として、生ハムや納豆などの開発を始める予定です。

YAMADAI TOPICS

人文社会科学部

Faculty of Humanities and Social Sciences

台湾師範大学生が 学部主催の 短期研修に参加



7月31日(月)から8月4日(金)まで、台湾師範大学台湾史研究所院生13名と引率教員2名が人文社会科学部主催の5日間短期研修に参加するために来校しました。

1日目と2日目、午前は人文社会科学部企画の「山形学」集中講義を受け、近世から近代にかけての山形の産業転換及び文化・思想の変容を学習し、午後は山大的茶道部で茶道の作法を学び、花笠踊りサークルの有志たちに花笠踊りを習い、山大ならではの学びと遊びを堪能しました。山形市内の男山酒造も見学し、日本酒の伝統を勉強しました。

3日目は中国語専攻の学生たちとパディを組み山形市近郊でウォークラリーを行いました。日台の学生たちは白鷹で紅花染を体験したり、市内の博物館や美術館、文翔館を見学したりして山形の魅力を自ら発見しました。

4日目と5日目は蔵王坊平高原で山大学生と一緒に農作業体験を取り入れた合宿を行いました。山形の自然や文化、歴史を満喫しつつ、山形の風土を生かした日台間のディープな学生交流ができました。

地域教育文化学部

Faculty of Education, Art and Science

地域教育文化学部 父母等学部説明会 〈オンデマンド〉を 開催しました

1～4年生の父母等を対象に動画配信(オンデマンド)による父母等学部説明会を開催しました。

本説明会では、父母等の皆様に学生の大学生活や学習環境を情報発信することを目的に、各種説明動画をホームページに掲載し5月9日(火)から期間限定で公開しました。内容は、学部長のあいさつ、学生指導及び大学生活について、進学について(大学院社会文化創造研究科・教育実践研究科)の紹介、チャレンジプログラム(6年一貫教育)について、就職について(進路説明と就職状況)とし、5～10分の各種動画にアクセスし視聴いただく形式としました。

父母等へ向けたオンデマンドの情報発信は初めての試みでしたが、多くの皆様に視聴いただくことができ、コロナ禍が開けた後の大学生活や新入生として初めての大学生活に不安を覚える父母等にとって、本学部学生の生活環境を知る機会になったことと思います。今後も本学部ではコロナ禍を経た後の生活習慣を取り入れながら学部の情報発信を行う予定です。



理学部

Faculty of Science

新入生歓迎企画 「クラス対抗綱引き大会」 実施



5月17日(水)から25日(木)の7日間、小白川キャンパスの陸上競技場で、理学部新入生歓迎企画「クラス対抗綱引き大会」を実施しました。イベントの実施にあたり、理学部後援会の支援を受けて綱と副賞を用意し、奥野貴士教授と理学部学生チームを中心に準備が進められました。大会は昼休みの時間に行われ、1年生のクラスを基準に、上級生や教員が声を掛け合って加わり、5チームに分かれてリーグ戦を行いました。大会期間中は天気にも恵まれ、連日熱い戦いが繰り広げられました。熱戦を制して優勝したのは、より多くのメンバーを集めた富樫准教授(化学)クラス、準優勝は北浦教授(物理)クラスでした。参加者には、副賞として小白川キャンパス近隣商店街16店舗で使える割引券が贈呈されました。

このイベントは、学生間のコミュニティ形成を促すこと、地域商店街との連携を深めることを目的に計画されました。来年度も引き続き、学生・教員や地域との連携を深める活動を計画していきます。

各学部からさまざまな話題や近況が届きました。
山形大学の多方面での活動、活躍にご注目ください。

医学部

Faculty of Medicine

西村康稔経済産業大臣が 山形大学医学部 東日本重粒子センターを 視察されました

7月16日(日)、西村康稔経済産業大臣が本学部東日本重粒子センターを訪れ、最先端技術を結集して作られた施設を視察されました。

はじめに、西村大臣から、「総合病院と直結となっている同センターにおいて、世界最小のYAMAGATAモデルで1000人を超える患者さんが治療を受けられたと伺った。医療機器や創薬の分野、また、バイオ分野などのニューフロンティアを支援している。ぜひ参考にさせていただきたい。」と挨拶がありました。次に、玉手英利学長から山形大学医学部東日本重粒子センターの現況についての説明を、岩井岳夫東日本重粒子センター長から重粒子線がん治療・装置の概略や重粒子線治療の状況について説明を受けられました。その後、根本建二理事(病院、財務担当)・副学長、上野義之医学部長らの案内により、回転ガンテリ照射室や固定照射室、重粒子線治療に使用される照射装置をご覧になりました。西村大臣は、根本理事や岩井センター長と熱心に意見交換されました。



工学部

Faculty of Engineering

駐日タイ王国特命 全権大使ご一行が 来学しました



6月27日(火) シントン・ラーピセートパン駐日タイ王国特命全権大使ご一行が、国際的研究拠点である有機エレクトロニクスイノベーションセンター等を視察されました。玉手英利学長、黒田充紀工学部長らが出迎え、佐野健志センター長からセンターに関する取り組みの説明がありました。また、タイ王国から本学に留学している学生の研究ショートプレゼンや、タイ王国に進出展開を希望している山形大学発スタートアップ企業からのプレゼン及びラボ見学を実施しました。その後、高橋辰宏教授から「山形大学は活発なプロデュース役を担っていききたい。」とのメッセージがあり、山形とタイ王国との連携に関して理解を深めていただく有意義な視察となりました。今回の視察は「山形大学と荘内銀行による産学連携協力協定」の一環で、学金が連携し、日タイの交流促進を目的とした産業をはじめとする幅広い分野での橋渡し役を担うべく実現したものです。

農学部

Faculty of Agriculture

留学生と地域住民との 交流イベント 「CROSS-CULTURE DAYS」を開催

6月1日(木)と3日(土)に、本学部の留学生、日本人学生、一般市民との交流イベント「CROSS-CULTURE DAYS」を開催しました。

両日合わせて40名が参加し、1日目は、本学部103講義室を会場に、世界の様々なおやつを囲みながら、英語での自己紹介や、それぞれの国の文化を紹介し合い、交流を深めました。2日目は、本学部附属やまがたフィールド科学センター(上名川演習林)において、エコサイエンスコース菊池俊一准教授の案内のもと、アカミズとアオミズを収穫しました。その後、出羽庄内国際村(鶴岡市)に移動し、五十嵐督敬シェフ(Blanc blanc gastropub)をお迎えして、採取したミズやワラビ、スマートテロワール麦きりを使って調理し、皆で味わいました。

イベントに参加した方々からは「普段経験できない体験ができて楽しかった」「言葉がうまく通じないところもあったが楽しく活動できた」「また参加したい」などの感想が寄せられ、2日間の交流により参加者同士の距離がぐっと縮まったようでした。今後さらに充実した国際交流イベントについて検討していく予定です。



調理の様子。下処理の仕方についても教えていただきました。

安心安全な医療体制をこれからも。 独自のデータベースを生かした研究で 持続可能な地域の医療体制構築を目指す。

村上正泰(大学院医学系研究科医療政策学講座教授)

医学部教授でありながら、経済学をバックグラウンドとする村上先生。財務省在籍時に厚生労働省に出向し、医療制度改革へ携わったことがきっかけで「医療政策学」の研究者に転向した。人口変化により全国的な医療体制の見直しが推進される中、2018年からは山形県の「地域医療構想アドバイザー」を兼務し、山形県内の医療体制構築に尽力している。数えきれないほどの本が並ぶ研究室でお話を伺った。

医療をとりまく様々な問題の政策を多岐にわたり研究

「医療」と聞いて思い浮かぶのは、基礎医学や臨床医学だろう。それと並んであるのが、村上先生が研究テーマとする「医療政策学」を含む社会医学という分野だ。医療では、国民のニーズに応じて医療を持続可能な形でかつ効率的に提供する体制を整備する必要がある。

その根幹となるのが政策だ。医療政策学とは、医療提供体制や医療を取り巻く様々な問題について、社会的、経済的観点からその政策的な対応策を研究する分野である。

村上先生ら医療政策学講座では、県内の医療機関ごとの医療従事者の配置状況や地域で果たしている診療機能、患者の受療動向などについて継続的なデータの集積と分析を行い、それをもとに地域医療・介護連携体制の構築に関する政策提言や病院経営戦略を導き出すという実践的な研究を実施している。これまでは「慢性期医療に係る病院訪問調査」「がん患者の就労状況・社会復帰に関する調査」「山形県内病院勤務医勤務実態調査」など、多岐にわたる研究プロジェクトに取り組んできた。

そして現在、村上先生が最も力を入れているのが、山形県のこれからの医療提供体制を考えるための研究だ。人口減少や高齢化といった変化の中で今後の地域の医療体制をどのように作っていくべきかについて、研究だけにとどまらず、山形県の地域医療構想アドバイザー（超高齢化社会に向け各都道府県が進める「地域医療構想」を推進するための役割）として県内の地域医療構想の議論に参加し提言を行っている。

これからの医療には証拠に基づく政策立案が必要不可欠

将来的な人口減少の程度や高齢化の割合は地域によって異なるため、地域医療構想は地域により考え方や進め方が大きく異なる。高齢者人口が爆発的に増える都市部に比べ、山形県ではその増加は緩やかで、2035年頃に75歳以上の後期高



村上正泰

むらかみまさやす ●医療政策学講座教授 / 広島県生まれ。東京大学経済学部卒業後、財務省に入省。厚生労働省保険局総務課課長補佐として医療制度改革に携わる。2010年より現職。

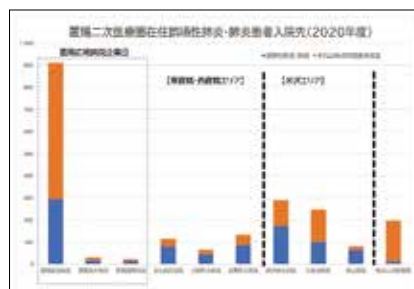
齢者の数がピークに至ると予測されている。以降は減少に転じるのだが、つまりそれは医療の側から見るとおよそ10年後には医療マーケットが縮小していくことを意味している。しかも、その動きはすでに県内の郡部から始まっているという。地域に人が少なくなれば、必然的にこれまでの医療体制を維持することが難しくなってくる。そのような状況の中で、機能や距離などのバランスを考慮した地域医療体制を構築していくためにはどうしたらよいのか。難しい局面だからこそ、政策検討の大前提としてデータを基にエビデンスを発掘し、根拠に基づいた政策を進めることが重要だと言う村上先生。その主張の根底には、かつて業界で「勘と度胸で決められている」と言われていた医療政策の問題を渦中で痛感した村上先生の強い思いが込められている。

変わり続ける地域の中で住民につながる医療体制を目指す

人口や医療ニーズが変わりゆく中で、今後医師に求められる役割も変化していくだろう。そんな時代に山形大学で学ぶ生徒たちへ、村上先生は「今どんな変化が医療の世界、医療提供体制に起きているのを知り、考えてもらいたい」と願っている。

「研究者として、そして山形県の地域医療構想アドバイザーとして、医療提供体制改革の議論にいかに関与できるかがこれからのテーマ」だと村上先生は今後の展望を力強く答えた。「ますます地方から人口減少が進み、より難しい局面に入らる中で、いかに地域住民につながるような医療体制を作っていくか。これからも研究を通じてエビデンスとなるデータを社会に還元し、議論や検討に役立てていきたい」。村上先生が見つめる未来には、これからも安心して医療を受けることができる、人にやさしい医療の姿がある。

村上先生の研究データ



県内全一般病院の83%の生の情報が集まるデータベースを分析し、国の公開データにはない山形県内の各エリアごとの詳細な情報を提示している。



病院の再編統合に全国に先駆けて取り組んでいる山形県。現在進行形の新たな動きにも村上先生が携わっている。

村上先生が手掛けた書籍



医療政策に関する書籍を多数出版している。

記者会見



医療政策学講座の学生が中心となってまとめたコロナ禍でのがん入院手術への影響に関する調査結果を記者会見で公表。

県の会議に出席



9月4日に県庁で行われた「山形県保健医療推進協議会地域医療構想病床機能調整推進部会」に出席する村上先生。副部会長を務めている。



布川楓

ぬのかわかえで●宮城県出身。平成29年3月人文学部法経政策学科卒業。仙台地方裁判所第一民事部所属。裁判所書記官として民事訴訟事件を担当している。

専心の成果



山大聖火リレー

「幼い頃から漠然と法律に関わる職業に憧れていて、法律が学べる地元に近い国立大学を志望し、山形大学の人文学部法経政策学科(現・人文社会科学部総合法律コース)に進学しました」と語るのは、現在、憧れを叶えて仙台地方裁判所に裁判所書記官として勤務する布川楓さん。大学では中島宏先生の憲法ゼミで放送法や憲法を中心に学び、サークルは裁判を題材とした劇を演じる模擬裁判実行委員会に所属。法律への関心はかなり高かったことが窺える。毎年12月に開催される模擬裁判公演では、1・2年次は実際に舞台上で演技を行うキャスト及びパンフレットの作成を、3年次にはキャストに演技指導を行う助演を担当した。苦労も多いサークル活動だったが、ここで得られたたくさんの友人や先輩・後輩との交流によって大学生生活はとても充実したものとなった。

現在、布川さんが所属する第一民事部は、主に民事訴訟事件の第一審を担当する部署で、裁判官とペアを組んで民事訴訟事件を担当しているという。一般的には馴染みのない裁判所書記官という官職だが、その業務内容は裁判手続に関する法律専門職として提出された訴状の点検、調書作成、裁判記録の整理等の事務のほか、裁判官の調査の補助や裁判を円滑に進行させるための様々な調整・事前準備等、実に多岐に渡る。しかも、裁判所書記官が行った業務が当事者の権利・義務に直結するためミスは許されないという責任は大変重い。その一方で、当事者間で和解が成立したときや当事者や弁護士・検察官・裁判官から頼りにされる場面では、誰かの役に立っていることが実感できるとあってやりがいも大きい。

将来的には、民事だけでなく刑事・家事・少年などの幅広い書記官事務を経験し、一通りなんでもできて、事件の当事者、裁判官、周囲の職員から頼りにされる書記官になることが目標。大学での学びを直接仕事に生かして活躍する先輩の姿は、後輩たちの希望や指針になることだろう。



漠然とした憧れから確固たる目標へ
大学時代の学びと経験が引き寄せた充実の今。

布川楓 仙台地方裁判所 裁判所書記官



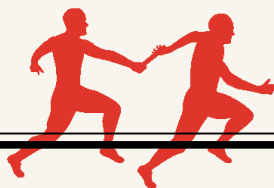
勉強に使用した資料の厚みや付箋の数から布川さんの学びの努力が窺える。



責任感のある仕事をする中でも私生活でのリフレッシュは忘れず、日々の仕事に励んでいる。

山形大学で学んだこと、過ごした日々、
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。
現役山大学生や卒業・修了生たちが各方面で活躍する姿を追った。

Humanities and Social Sciences • Education, Art and Science •
Science • Medicine • Engineering • Agriculture



継続の成果

現在、大学院理工学研究科で建築・デザイン・マネジメントを専攻する森佑季さんは、本学の現役学生であり卒業生でもある。学部生時代は日本建築史や歴史的建造物の保存と活用などを専門とする永井康雄先生の研究室で学び、卒業後は仙台市の建築設計事務所にて就職。その会社は、副業制度や出社併用型リモートワークなど、新しい働き方を取り入れることに積極的な会社で、先輩社員が仕事をしながら都内の大学で博士課程を履修するという前例をつくった。学部卒業時、本当は大学院に進学して建築の歴史をもっと深く学びたいとの思いがあった森さんは、先輩の姿に刺激を受けて自分も大学院で学び直しがしたいと上司に相談。新たにフレックスタイム制を導入し、週2〜3日の出勤とリモートワークで業務を行い、それ以外の時間で大学の授業や研究室活動に取り組みせてもらえることになったのだ。

大学院でも永井研究室に所属し、県内外の歴史的な建造物や町並みの視察や調査を行っている。古文書や図面などをもとに自身が研究テーマとしている歴史的建造物を手掛けた工匠の研究を行いながら、大学で再び勉強ができていく喜びを実感する日々を送っている。とはいえ、仕事と学業の両立は当然ラクではない。夕方までリモートで仕事をして夕方から研究室で調べ物をする日もあれば、土・日に課題に取り組むことも。しかし、その忙しさの中で時間の有効な使い方や実務に生かせる視点で授業を受ける姿勢などが身に付いた。「一度社会に出たからこそ、大学での学びが新鮮でいい意味で食欲に学んでいます。会社の理解と協力に感謝です」と森さん。

今後は、もっと知識や経験を積み、永井先生のように伝統的建造物の保存活動に関わりたいという思いがあれば、建築史から学んだこと、建物や景観の視察で培った感性を会社で行う設計業務に生かしたいとの展望もある。大学院での学びの先に森さんはどんな未来を描くのか、学び直しの成果に期待したい。

※ 所属や学年は取材時のものです。



学部生時代に課題として取り組んだ店舗設計の模型について説明する森さん。課題では山形市や米沢市の実際の建物や街を題材にして設計を行うことも。



歴史的な建物や町並みを見学、調査するフィールドワークが多い。研究エリアは山形、宮城、富山など。

社会人経験によって学ぶ意識に生まれた変化 仕事との両立で理想的な学び直しを實踐中。

森佑季 大学院理工学研究科 建築・デザイン・マネジメント専攻 1年



村山地域での学会・大会・研究会等、ご相談ください

主な支援のご案内

◆ コンベンション開催助成金

宿泊者数に応じて支援 国内在住参加者1人あたり 3,000円~
国外在住参加者1人あたり 10,000円~

◆ 貸切バス費用支援

例) 現地参加者100人以上1,000人以下の場合、100,000円
開催地以外の村山広域圏へエクスカーションすると+100,000円プラス

◆ アトラクション費用支援

※その他、会場選定のご相談等様々な支援で、学会・大会・研究会等の開催をサポートします！

ご相談はお早めに！詳しくは下記までお問い合わせください！



支援内容はこちらからも
ご覧いただけます。



村
山
地
域



一般財団法人 **山形コンベンションビューロー**

TEL: 023-635-3000
E: sales@convention.or.jp

山形 コンベンション

検索

庄内地域での学会・研究会 開催についてご相談ください！

当協会は、鶴岡市・酒田市・三川町・庄内町・遊佐町及び戸沢村で
開催の学会等の開催支援を行っています。お気軽にご相談ください。

- ① 歓迎看板の掲出
- ② 観光パンフレット
 Congressバック提供
- ③ エクスカーション等の相談
- ④ 開催支援助成金 等



令和5年度の開催支援助成金は…

宿泊参加者助成金。200名以上の場合は更に増額！

感染症対策・ハイブリッド開催経費の助成も(上限100万円)

* 各種要件等の詳細は当協会までお問合せください。



庄内観光コンベンション協会
やまがた庄内観光サイト <https://mokedano.net/>

TEL. 0235-68-2511
山形県東田川郡三川町大字横山字袖東19-1

開催支援詳細



庄
内
地
域

旅行から学会・研究会等まで幅広いご相談にご対応いたします！

- * オンライン配信手配 (ハイブリッド開催)
- * メイン会場手配・設営準備
- * レセプション手配
- * 事務局業務全般・各種助成金の申請
→ 参加受付・ワークショップ等の参加受付 / 入金管理の一本化

・宿泊斡旋
・食事手配
だけが旅行会社の仕事だと
思っていませんか？



お気軽にお問い合わせください！



(株)日本旅行東北山形支店 TEL: 023-631-2295

山形コンベンションビューロー会員

メール: shihona_suzuki@nta.co.jp URL: <https://www.nta.co.jp/shop/shoplist/2366/>



ホームページ

山
形
市

広告掲載ご希望の方は、山形大学総務部総務課秘書広報室までお問い合わせください。TEL. 023-628-4010

地域・世界の多様な人々を 時間と空間を超えてつなぐ“コモンズ”へ

山形大学は、『つなぐちから。山形大学』～共育・共創・共生による持続可能な幸福社会の実現～を将来ビジョンとして掲げています。あらゆる垣根を越えて、人と人、知識と知識を縦横無尽につなぐちからで、新時代を切り拓く人材と新たな知を創出し、多様な人々が出会い活躍する「コモンズ」として、地域から愛され、地域と共に発展する大学を目指しています。

本号でご紹介する取り組み以外にも、総合大学である強みを生かして、さまざまな取り組みを行っています。今後も、教育・研究・社会連携の全てにおいて、“つなぐちから”となる機能を高め、社会に大きなインパクトをもたらしていきたいと考えています。

自治体と（キャリアサポートセンター）



Webサイトはこちら▶
参加自治体の魅力を紹介する
動画も公開中です!

やまがたの自治体発見プログラム

- 連携先 山形県、山形市、新庄市、鶴岡市、長井市
- 目的 大学および地域の課題である学生の県内定着促進を目指し、学生へのアプローチに課題がある県内の各自治体に対して、地域で働く・暮らす魅力を学生に伝える機会(場)を提供します。
- 活動内容 5自治体(山形県、山形市、新庄市、長井市、鶴岡市)と連携し、山形大学のWebサイト内に特設サイトを開設しました。自治体PR動画および各自治体の資料・SNSリンクを掲載することで、学生に山形県内の自治体の魅力を発信しました。本サイトの開設により、各自治体情報を一覧できるようになり、2023年1月13日～1月26日までの公開期間中、延べ387名の閲覧があり、当初予定していた期間を延長して公開しました。
- 今後の展開 掲載自治体を増やすために「やまがた社会共創プラットフォーム」加盟自治体への案内を行う予定です。特設サイトの自治体情報をさらに見やすくするための工夫などに取り組みます。

※本サイトは、みやぎ・せんだい地域人材育成協働事業プラットフォーム事務局の助言および支援をいただき、「みやぎの自治体発見プログラム」を参考に、山形大学が企画・運営しています。

子どもと（山形大学地域共創STEAM教育推進センター+秘書広報室）



Webサイトは
こちら▼



令和5年度「こども霞が関見学デー」

- 目的
 - 山形大学地域共創STEAM教育推進センター…文部科学省が推進している『STEAM教育』の拠点を目指して2022年4月に創設されました。山形大学の最先端の研究や技術、施設を活用しながら、地域の子どもたちに多様な「知(STEAM教育)」を直に届ける開かれた山形大学を目指しています。
 - こども霞が関見学デー…子どもたちを対象に業務説明や職場見学等を行うことにより、子どもたちが夏休みに広く社会を知る体験活動の機会とし、親子のふれあいを深めるために実施しています。霞が関に所在する文部科学省をはじめとした各府省庁等が連携し、今年は28の府省庁等がプログラムを実施し、山形大学は、文部科学省主催のブースに出展しました。
- 活動内容 2023年8月2日(水)～3日(木)、山形大学地域共創STEAM教育推進センターと秘書広報室は、文部科学省をはじめとした各府省庁が連携して実施する「こども霞が関見学デー」において、虹色銅箔作成や紅花染め等を体験できるブースを出展しました。2日間で延べ600名を超える子どもたちが参加し、保護者等も含めると、1200名以上の方が山形大学のブースを訪れ、参加した子どもたちの笑顔や真剣に実験に向き合う姿が見られました。
- 今後の展開 今後も子どもたち誰もが豊かな学びを体験できる拠点に、そして、子どもたちの教育に関わる誰もが山形大学のSTEAM教育を利用できるように、地域に開かれた『YU ★ STEAM』を目指していきます。

見つけて!感じて!
サイエンスマジック!

Be☆らぼ!

山大サイエンスカー



金曜日
(第1週)
20:00 - 20:30

月 日 ()
直 リズム
ス テーション

県内各地の中学校で「出張実験×ラジオ放送」を展開中です♪
最新の科学をわかりやすい実験を通して紹介!
生徒たちの中で流行していること、学校の特色・取り組みなども
インタビューしていきます!



栗山恭直
(山形大学教授
(理学部担当))



福田雅
(リズムステーション
アナウンサー)

県内の中学生にもっと科学の楽しさを知ってもらいたい!そんな思いを胸に、
栗山先生と福田アナウンサーが、山大サイエンスカーで出張実験にまわります。
サイエンスマジックを見つけてもらうためのスペシャルプログラムです♪
これまでの実験回数はなんと100回以上にもなります。

実験で大切にしているのは
「身の回りにある不思議に
科学で迫っていく」
というスタイル!!
今回は新庄市にある
萩野学園での実験の
様子を紹介します。

新庄市立萩野学園



ちなみに水素と酸素に火を近づけると、
大きな音を立てて爆発が起こります!!
最初は怖がっていた中学生も、途中から
もっと大きな爆発を起こそうと積極的に
いろんな方法を自分から考えていました。

実験のテーマは『電気分解』。
「水は電気による分解を行うと水素と酸素になる」…
中学校の理科で習う内容なのですが、
Be☆らぼの実験は一味違う!!
実際に水素と酸素が発生している事を
確かめるために火を近づけて
その反応を見るのがこの実験のポイント♪

爆発が起きるほど力強い水素パワー。
現在は「燃料電池」としての
研究・実用化が盛んに行われています。
人類の未来を明るく照らす「科学」。
その可能性に触れることができるのが
「Be☆らぼ!山大サイエンスカー」です!!

これからも
**Let's enjoy
science magic!**

マジック

MAGIC on Friday

週末にもかかってのワクワクを後押しするフライデープログラム。
ラジオの前の「あなた」とつながる様々な企画・情報、そして音楽で
あなたの金曜日に「Happiest Moment(最高の瞬間)」をお届けします!
放送回数も200回を越えてまだまだ加速中!
4年目のシーズンもこれまで以上に笑顔をお届けします!
X(旧Twitter)やInstagramも毎週更新していますので是非のぞいてみてください♪

ON AIR!!

毎週金曜日
16:00-18:55



MICHICA

ワッキー 貝山

福田雅



株式会社エフエム山形

本社/山形市松山三丁目14番69号 TEL 023-625-0804
庄内支社/鶴岡市茅原町28番47号 TEL 0235-22-6800

番組ブログ更新中! 山形大学のホームページで過去の放送を聴くことができます♪

www.rfm.co.jp

周波数

山形 80.4MHz
鶴岡 76.9MHz
新庄 78.2MHz
米沢 77.3MHz



「山形大学基金」にご協力いただきありがとうございます。

日頃より山形大学にご支援を賜り厚く御礼を申し上げます。

山形大学基金は、本学における学生支援及び教育研究支援等に資することを目的に創設いたしました。

令和4年度は延べ741人の方から24,077,030円のご寄付を賜り、大学及び学生の活動支援（公認学生サークル、学部等、附属学校（園）、未来プロジェクト）として7,345,860円を支援することができました。

本基金の趣旨へのご理解を賜りますとともに、今後ともより一層のお力添えを賜りますよう、よろしくお願いいたします。



山形大学基金ホームページ



山形大学基金 ご寄付への謝意

山形大学基金による物価高に対する経済対策支援(令和5年6月実施)

円安やウクライナ情勢などの国際情勢に端を発した資源価格上昇により物価高が生じています。このような状況を踏まえて、山形大学基金からの支援により、日々の生活で物価高の影響を受けている学部生・院生のみなさんに対し、6月22日・23日に米沢キャンパス、26日に鶴岡キャンパス、27日に飯田キャンパス、28日・29日に小白川キャンパスにおいて食料品を無料で配布しました。

バックご飯や、乾麺、缶詰、インスタント食品、ペットボトル飲料など、21種類の食料品の中から、一人5品、好きなものを選んで持ち帰り、計4470名の学生に対し、今回の支援を行うことができました。山形大学基金にご寄付いただいた皆様へ心より御礼申し上げます。



生活に必要な食べ物、
生活用品を無償で提供して
頂きありがとうございます！

学生の身として
とても助かるので
定期的に行ってほしいです



流れがスムーズで
非常に助かりました
ありがとうございます

食べ物の値段がどれも
高騰しているので、
非常に良かったです

いい支援を
ありがとうございます



食糧支援、非常に助かります
また次回もよろしく
お願いいたします

「やまだい未来へつなぐプロジェクト」の
新プロジェクト“山形大学医学部
創立50周年記念事業”の募金を開始しました



山形大学医学部が次の50年に向けて益々の発展と飛躍の礎を築き上げ、さらに強固なものとするために、何卒、本趣旨にご理解、そしてご賛同いただき、ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。



医学部創立50周年記念事業寄付お申込み▶

「附属学校（園）への支援」において附属幼稚園の
大型遊具更新の募金を開始しました



附属幼稚園創立120周年の機会に、本園東側に設置されています大型遊具の更新やその他環境整備を行い、園児の安心・安全とさらなる日々の遊びの充実を図りたいと考えております。この趣旨にご賛同いただき格段のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



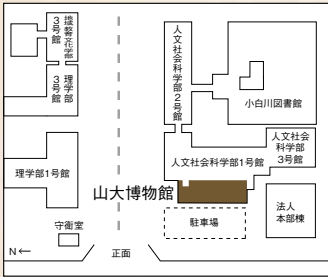
附属幼稚園創立120周年事業寄付お申込み▶



山大博物館

シリーズ 44

山形大学附属博物館の収蔵品をはじめ、
大学が誇る貴重な資料を紹介いたします。



しらいしじま 《白石島》 満谷 国四郎

1921(大正11)年頃 キャンパスに油彩 45.7×53.1cm



国土地理院 vector を加工して作図



〈筆者撮影写真〉2022年12月24日 岡山県笠岡市北木島より白石島を望む、左端に北木島の一部が見える(矢印)。

明治から昭和にかけて活躍した洋画家である満谷国四郎(1874[明治7]年~1936[昭和11]年)による作品で、当時作者がよく描いた瀬戸内海風景のひとつ。2007(平成19)年に本学理学部において「発見」され、本学附属博物館に移管された。画面左下に「K.Mitsutani」と署名があり、画面裏側に「白石島 満谷 一九廿一年」と読み得る書き込みがある。また「山形高等学校第十七号」との裏書きから山形高等学校旧蔵であることがわかる。同校に収蔵された経緯は不詳だが、作者と親しかった山形出身の彫刻家である新海竹太郎(1868[慶応4]年-1927[昭和2]年)が関係しているかもしれない。

「発見」の際の報告書において、筆者は同作品を岡山県笠岡諸島のひとつである「白石島」から北側の「高島」を眺めて描いたものとしたが、昨年の現地調査で題名どおり「白石島」を描いたものであることが判明したので訂正したい。すなわち本作品は白石島の南側にある「北木島」から眺めた白石島を描いたもので、具体的には通称「北木島のベニス」に近い、北木島の豊浦港と金風呂港の中間にある海岸沿いから白石島を眺めた景色を描いたものと考えられる(参照:筆者撮影写真)。理由は島の形状が作品に近いこと。また作品では松の木に隠れて見えづらいが、画面左端に写生地点から地続きの北木島の一部が描かれているのが決定的証拠である(参照:筆者撮影写真)。北木島は花崗岩の産地として栄えた所。作品には点景で帆掛け船も描かれ当時の瀬戸内海運の隆盛を偲ばせる。現地写真と比べると作品は絵画的にデフォルメ(変形)されており、当時作者が取り組んだ装飾的な画風への接近がみられる作品である。

(学術研究院教授 小林俊介/地域教育文化学部主担当)



画面左端に写生地点から地続きの北木島の一部が描かれている。

今号の
表紙

特集で取り上げているアグリフードシステム先端研究センター(YAAS)の活動の様子。海、山、水田、畑などを表すYAASのカラフルなロゴのように、様々なフィールドで活動が行われている。YAASが盛り上げる今後の庄内の姿に期待したい。

●この「みどり樹」は山形大学ホームページでもご覧になれます。

山形大学 みどり樹 検索

●「みどり樹」は、年2回(春号・秋号)発行する予定です。

●みどり樹WEBアンケートを実施中です。ご意見や感想をお寄せください。

